

● 放送文化基金賞のあゆみ ●

スタート時より、番組だけでなく放送文化・技術を表彰

放送文化基金賞は、設立当初から「個人・グループ部門」として、放送の番組制作、放送に関する研究・調査、放送の普及・発達等に貢献のあった個人またはグループを表彰する「放送文化」、放送に関する技術の研究・開発等で成果をあげた個人またはグループを表彰する「放送技術」にも賞を贈ってきた。番組部門は、「視聴者に感銘を与えたすぐれた放送番組」を基準にドキュメンタリー、少年幼児番組、社会福祉番組を表彰していたが、第9回からラジオ部門、テレビ部門に分類した。

第1回 受賞一覧

番組部門(T)…テレビ (R)…ラジオ

ドキュメンタリー番組

- 本 賞 RKB毎日放送 (T) 鉛の霧
- 奨励賞 長崎放送 (R) 鉱害かくし
- 奨励賞 NHK (T) 皿の碑

少年幼児番組

- 本 賞 NHK (T) 特撮昆虫記
- 奨励賞 NHK (T) 連続人形劇「新八犬伝」
- 奨励賞 毎日放送 (R) MBS子ども音楽コンクール

社会福祉番組

- 本 賞 テレビ神奈川 (T) 暮しのワイドリビング・レポート「ふれあいを求めて」
- 奨励賞 日本短波放送 (R) 重い障害児のために
- 奨励賞 NHK (R) 盲人の時間

個人部門

- 木村昱介(青森放送)
郷土を素材にした優秀番組の制作
- YTVレポート編集グループ(読売テレビ放送)
「YTVレポート」誌の編集
- 国民生活時間調査グループ(NHK)
「国民生活時間調査」の実施
- 潜水撮影グループ(NHK)
潜水撮影による番組制作への貢献
- 稲垣史生(時代考証家)
時代考証による番組への貢献

技術部門

- 放送聴取用ポータブルダイバーシティ受信機の開発
(日本短波放送 深沢 治男 他)
- ヘリコプター・アンテナ自動追尾システムの開発
(東京放送 川崎 明 他)
- デジタル化したテレビジョン標準方式変換装置の開発
(NHK 谷村 洋 他)
- 建築音響技術の研究・開発
(NHK 山本 照二 他)
- テレビジョン受信機のシールドアンテナ端子板の開発
(松下電器産業 伊藤 公夫 他)

第1回贈呈式



第9回贈呈式



第15回贈呈式



いち早く独立プロダクションにも門戸を開く

第10回からは、いち早く、独立プロダクションからの参加を呼びかけた。これは、設立当初から審査委員を務めていた故・小谷正一氏の「NHKと民放の放送局だけを対象にして賞を贈る時代ではない。実際に番組をつくっている独立プロダクションを視野にいれるべ



第15回パンフレットより

きである」という熱意のもと実現した。そして、第15回テレビドキュメンタリー番組の本賞（最優秀賞）を『たずね人の時間』で独立プロダクションのタキオンが受賞した。

また、第15回から「演技賞」が設置され、長瀬剛さん、伊藤蘭さんが受賞した。これまでに二度「演技賞」を受賞したのは大竹しのぶさん、桃井かおりさん、尾野真千子さん、満島ひかりさんの4名。第18回から番組部門の中に“個別分野賞”が設けられた。この賞は、作品そのものに賞を贈ると同時に、番組制作にかかわる方々の励みになるような賞をと考え新設された。第18回では、「企画賞」、「映像・音響効果賞」、「音楽賞」が贈られた。

エンターテインメント部門誕生

「テレビのひとつの大きな分野であり、また多くの視聴者がみている娯楽番組にスポットが当てられないか」ということから、第23回からテレビエンターテインメント部門を設置。2年連続で本賞（最優秀賞）には該当作品がなかったが、第25回で『詩のボクシング』（NHK、NHKエデュケーショナル、テレコムスタッフ）が初めて本賞（最優秀賞）を受賞した。その後テレビエンターテインメント部門は、一時中断したものの第35回から再び設置された。



第25回パンフレットより

ふたつの最優秀賞

ドキュメンタリー部門で、本賞（最優秀賞）が二作品選ばれた年が一度だけある。

第38回のテレビドキュメンタリー部門で『幾歳経るとも要心あれー2011.03.11.東日本大震災ー』（IBC岩手放送）、『NHKスペシャル 38分間 巨大津波 いのちの記録』の二作品である。これについて、当時の故・吉田喜重委員長が次のようにコメントしている。

「コンクールの審査とは、作品を批評、評価することにある。しかし語るべき言葉を失い、記憶された映像を、ただただ見るしかない場合がある。残酷にも偶然が捉えた映像、それ以外はしょせん虚構の表現にすぎない。それが二作品に本賞が贈られる理由だろう。」（第38回パンフレット講評より）

さらにウィング広げて

放送・通信をとりまく環境がめまぐるしく日々変化している中で、第49回からは配信コンテンツにも表彰対象を広げることにした。“テレビ”という名称を取り、ドキュメンタリー部門、ドラマ部門、エンターテインメント部門、ラジオ部門、放送文化部門、放送技術部門と名称も変更した。50年を機に放送文化基金賞をより発展させ、少しでも制作者の方々の励みになれば幸いである。



第49回から盾・トロフィーのデザインを新しくしました

第50回放送文化基金賞の
応募受付は2024年3月1日から

過去の受賞作品は
データベースをご覧ください。



吉田喜重さんの思い出

放送文化基金賞審査委員長 桐野 夏生
(作家)

初めて吉田喜重さんにお目にかかったのは、20年近くも前になろうか。ある映画コンクール審査会の席上だった。週刊誌の映評の仕事了一年ほどしていたこともあったの指名だったのだろうが、他の審査員の方は有名な男性映画評論家ばかり。私は激しい頭痛がするほど緊張していた。しかし、皆さんが推されていた作品に対して反対のコメントをした。それは特攻隊の物語で、死を決意した兄が弟に妻を譲る話だった。どうしても美談とは思えなかったのだ。すると、私の意見を後押ししてくださった方がいた。吉田喜重さんである。吉田喜重監督と言えば、私にとっては神々しいほどの存在だったから、そのフェアな言葉に救われた。こういう方が優れた作品を作るのだ、と思った。

その縁があつてか、吉田喜重さんに誘われて放送文化基金のドキュメンタリー賞の審査の末席に加わるようになった。それが2008年のことである。

コロナ禍前は、4月の中旬頃の月曜に審査員全員が放送文化基金の事務局に集まる。吉田喜重さんは、いつも黒い立て襟のスーツをお召しになって、中には黒のタートル。肌寒いと感じる日には、灰色のマフラーをしておられた。そのお姿は、十何年経っても変わることはなかった。

審査は二班に分かれ、90本近くある応募作品をふたつに分けて一週間にわたって見る。討議の日もあるので、一日十数本見ないと間に合わない。部屋を真っ暗にして朝から夕刻まで画面を見ているのだから、目は疲れるし眠くもなる。それでも、吉田喜重さんは、常に端然と画面をご覧になり、どんな作品に対してもフェアで丁寧な姿勢を崩さなかった。吉田喜重さんと一緒に多くの作品を見て、吉田喜重さんの言葉を聞いてきた。それは私の財産であり、今の私を形作っていると言っても過言ではない。もつとも、そんなことを言えば、吉田喜重さんは優しく苦笑されるであろう。それでも、吉田喜重さんの魂を継いでゆければと、心から願っている。

無限に広がる可能性

放送文化基金賞専門委員 白石 公子
(詩人)

このたびは放送文化基金50周年、おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

私は今でも、初めて放送文化基金の審査に参加させて頂いたときのことは忘れられません。1997年の第23回。その年はじめて設立された「エンターテインメント」部門の審査でした。錚々たる委員の方々と、一日中同部屋で、数本の番組視聴、無駄話ができないような雰囲気、昼食など、なにかも初めてづくしの緊張、ハードな一週間。また最終日の選考会議も難航を極め、重苦しい空気に包まれていきました。なにしろ私こそがエンターテインメント部門、記念すべき一回目、ぜひとも【本賞】作品を出したい、と推し続けていたのです。かなり気負っていたのかもしません。

それでも議論を尽くし、最終的に【本賞】「該当なし」に決まったとき、それまでの疲れが吹き飛ぶほどのすがすがしさと、充実感で満たされたことをはっきり覚えています。歴史ある「放送文化基金」の洗礼、審査する醍醐味を知った瞬間でもありました。

その後、主にドラマ選考に携わってきました。どんなメディアよりも先に、この審査で時代の変化、「今」の社会問題、新しい息吹を感じてきたように思います。なかでも「昭和が歴史になった」と実感したときのことも忘れられません。昭和の事件やテレビの黎明期を、虚と実、実際の映像を交錯させながら描いたドキュメンタリー・ドラマの出現。また脚本家のオリジナル作品が少なくなり、人気漫画や小説を原作としたドラマが台頭してきたのです。このときも議論が沸騰しました。しかし、目を見張るほどのIT化の進化は、世界的人気の日本のアート&カルチャー（映像、美術、文学、漫画、音楽、アニメ、ファッション、グルメ）を巻き込みながら、放送文化の可能性を無限に広げていることがわかります。世界に発信できる日本独自の「放送文化」になっていくのをぜひとも見届けたいと思っています。

制作者の本分、その道標として

森 理恵子

テラ・プロジェクト

放送文化基金設立50周年おめでとうございます。

制作者として日々を生きるなかで、様々な人々との「出逢い」がありました。その生き様や葛藤に心を動かされ、追いかけて、ドキュメンタリー作品という一つの表現に集約していく。達成感のある仕事ではありますが、それゆえに重さを感じます。

自分の目は濁っていないか、自分自身をごまかしていないか。さらに、SNS、AIと、世の中の情報伝達手段や表現手段が加速的に短絡化していくこの時代、いかに「人としての、ものさし」を見極め、本質を失わず立ち続けることが大切か、律することもしばしばです。

そうした中で、コンクールという存在は、制作者が「人としての、ものさし」を再確認する場であり、また、制作者の「出逢い」をより多くの人々と共有し、波紋を投げかける、という大変重要な役割を担っていると感じています。特に、放送文化基金賞は、民放・NHK・コミュニティといった放送局の垣根を越えて寄せられた作品が評価の対象であり、金田一先生をはじめ、審査員の皆様のご見識の高さと豊かさ、人間力、また、事務局の皆様のきめ細やかなお手配に裏打ちされた、無二のコンクールと認識しています。

ちなみに、受賞の記念冊子を取材対象の皆様にお渡しした際に、「丁寧に読み応えがある」「一生の宝物」「励みに生きる」と喜んでいただきました。音声だけのラジオ作品にとってはいっそうありがたく、かけがえのないお返しができたこと、一番嬉しいご褒美でした。

受賞の栄誉に浴した『贅の森』『マリエのように』で取材させていただいた皆様は、ともに受賞を機会にますますご活躍されており、かけがえのない命を燃やし続けておられます。制作者として最上の喜びを与えていただきましたこと、心より感謝申し上げます。

これからも権威あるコンクールとして、道標をお示しいただきますよう、ご活躍、ご発展をお祈り申し上げます。

放送技術の発展とともに50年！

小池 中

日本テレビ放送網 技術統括局
コンテンツ技術運用部 主任

放送文化基金の思い出といえば、授賞式の翌日、結婚指輪を排水溝に流してなくしてしまったことなのですが…。それはさておき、初めてその存在を知ったのは、20代半ばでシステム担当になったばかりの頃、過去に放送文化基金賞（放送技術部門）で受賞経験があったベテラン社員から開発実績について話を聞いた時でした。

放送技術において大変権威のある賞であることを知り、受賞への憧れを抱きつつも、まずは一人前の技術者になるべく研鑽を積む日々を送ること早15年。その間に私も2度（第43回・アーカイブ統合型ニュース制作システムの開発、第49回・制作系番組制作フローを効率化するDXツール『Alligator』の開発）受賞させていただく機会に恵まれました。

いずれの開発も、対象となる利用者は報道・スポーツ向けと制作向けとで異なりますが、従来多くの時間を要していた映像編集に関わる作業を自動化し、業務効率化を実現したことに対して評価いただいたものでした。開発メンバーとともに、自分自身が利用者だったら何を改善したいと思うのかを日々自問自答しながら生み出した仕組みでしたので、受賞が決まった際の喜びもひとしおでした。

映像編集の分野ではさらなる高度化の余地が残されていることもあり、今後も同様に研究・開発を続け、利用者の利便性向上に尽力したいと考えています。

先人の方々が連綿と積み重ねてこられた研究・開発により表彰された事績は、我が国における放送技術の発展が記録されたひとつの歴史としても捉えることができます。50年という長い間、番組・配信コンテンツ制作や放送文化への貢献とともに、放送技術の研究・開発に対し表彰という形でスポットを当て続けてくださったことに、それらの業務に関わる技術者の一人として深く御礼申し上げます。最後に、この先の未来でも放送文化基金賞が技術者にとっての憧れであり続けるべく、益々のご発展を祈念しています。